

祈り

平成18年7月豪雨災害の活動記録

諏訪市消防団

発刊にあたって

諏訪市消防団 団長

牛 山 智 明

今回この7月の豪雨災害記録を発刊するにあたって、ラッパ長を編集事務局に分団長8名の編集委員、副団長の監修と消防団の知恵と努力、協力により発刊することが出来たことを感謝申し上げます。

平成17年末から18年度は、新年早々、小学生の行方不明の捜索、4月からの連続6件の不審火による連日連夜の夜警、3ヶ月にも及んだ。

そして息をつく暇もなく忘れもしない7月の豪雨です。7月17日から始まり一週間、前日から大雨、この日17日の朝8:00に消防署から「団長！危機管理室から集合の連絡が来ました。」との一報が入り早速、市役所3階の危機管理室に出向きました。この17日は海の日祭日、雨は降り続き市内あちらこちらで冠水が始まった。この雨は、梅雨前線による影響で、集中豪雨となり10日間にも及び、消防団員は延べ2,240人が出動しました。特に17日～19日の集中豪雨は、止むことなく経験ない雨量でした。道路は冠水し、山から流れる川は、土石流が発生し危険な状況でした。この状況下の中で消防団員は、昼夜にわたり水防活動を行うとともに、住民の避難誘導、人命救助を行いました。この間人的被害がなかったことは、日頃の水防意識、訓練の成果だと思います。

このように、団員959名諸君の命を懸けた経験を冊子にまとめ、どこにどのような災害が、避難する時の状況は、水量・雨量・濁り・音・動き、いろんな状況を判断し活動指示をしなければならない、なかなか出来るものではありません。この冊子をそれぞれの分団で必読とするとともに、新入団員の研修に活用することがこれからの災害に役立つと信じています。最大限活用をおねがいましたものです。

目 次

1. 災害の全容	
(1) 平成18年7月豪雨災害被害状況	1
(2) 諏訪市消防団 出動状況	2
(3) 過去の災害との比較	3
2. 諏訪市消防団 活動記録	
(1) 諏訪市消防団 活動記録一覧	5
(2) 諏訪市消防団 活動記録細目	8
3. 寄稿 平成18年7月豪雨災害	11
(1) 豪雨水害時の活動と対応について	福島新町区長 齋藤 幸雄
(2) 2007水害を振り返って	団員家族 塩原 たか子
(3) 7月豪雨災害を経て	団員家族 池 井 康 江
(4) 豪雨災害活動を通じ	第五分団副分団長 宮 坂 孝
(5) 集中豪雨の猛威	第六分団部長 矢 崎 恒 彦
(6) 7月豪雨災害を振り返って	第七分団副分団長 矢 島 裕 一
(7) そして水害へ	第八分団部長 藤 森 鉄 哉
4. 対談 豪雨災害を経験して	18
5. 災害活動を振り返り	19

～ 表題に寄せて ～

「祈り」。平成18年7月豪雨災害を振り返るとき、この言葉が強く思い出されます。「どうかこれ以上降らないでくれ。」「どうかこれ以上水位が上がらないでくれ。」「どうか崩れないでくれ。」「どうか……。どうか……。」そして、極限の身体的精神的な状態の中、不安と戸惑いを感じ、それでも気力を振り絞って判断し、指示を出し、行動しました。

我々消防団員は災害のプロではなく一市民です。しかし、消防団としての訓練を積み、団結を養い、精神力を鍛錬しています。何より、平素から火災・災害に対して 装備 心構え 等、備えを怠らない様努力しています。このたゆみ無い活動の積み重ねが、この未曾有の災害での活動につながったと実感しています。

今回の災害で我々消防団員が 何を感じ 何を思い 何をしたか。我々自身、忘れてしまうことが無い様この記録を作りました。この記録が今後長期にわたり消防団活動の一助となることを願って止みません。

記録編集にあたり、数多くの方々に多大なご協力をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

平成18年7月豪雨災害の活動記録 編集事務局 ラッパ長 山 田 正 浩



豊田地区の浸水



新川の増水

平成18年7月豪雨災害による
諏訪市の浸水状況及び他の被災状況

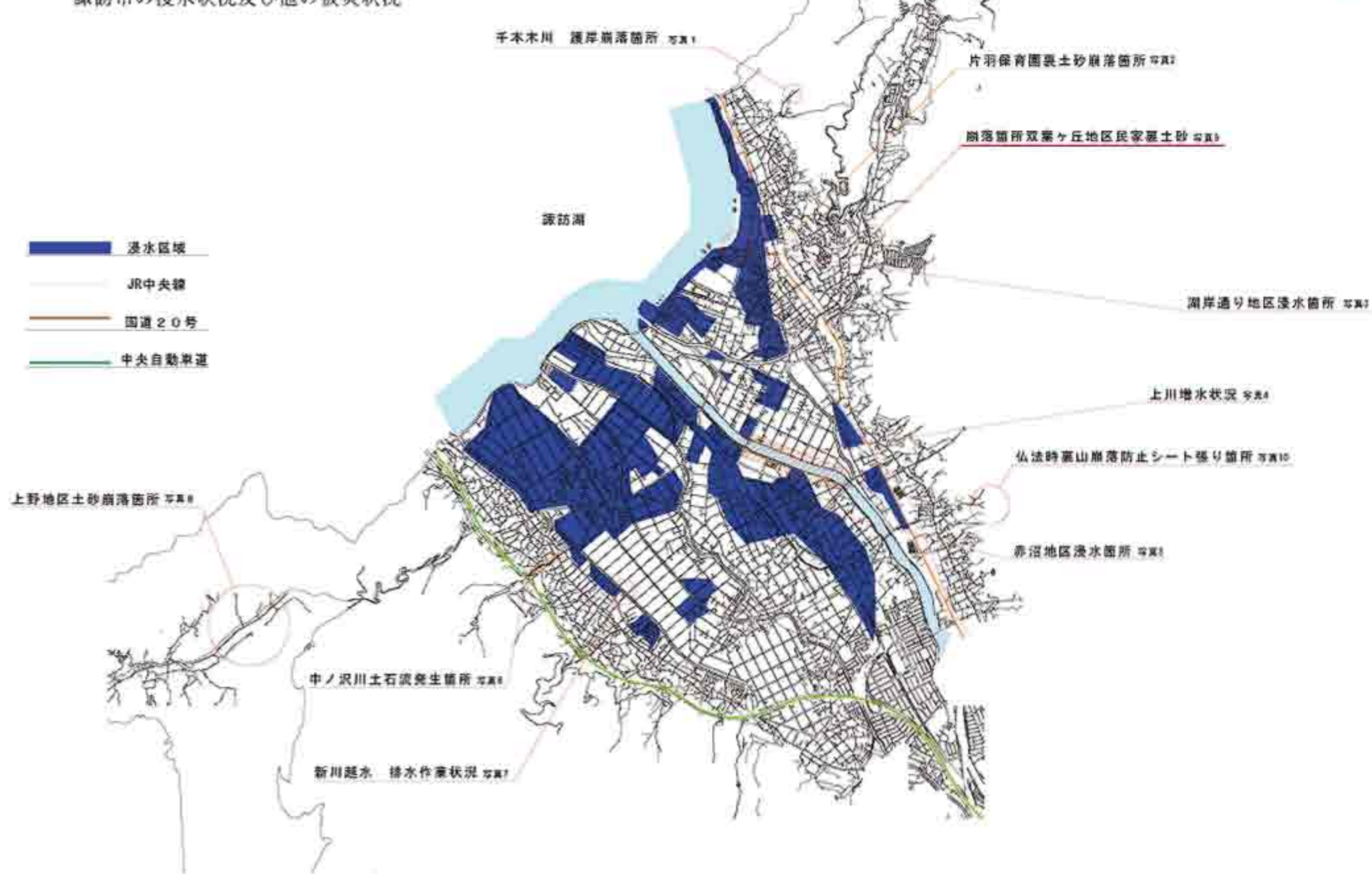




写真1 千本木川 護岸崩落箇所



写真2 片羽保育園裏 土砂崩落箇所



写真3 湖岸通り地区 浸水箇所



写真4 上川 増水状況



写真5 赤沼地区 浸水箇所



写真6 中ノ沢川 土石流発生箇所



写真7 新川 排水作業状況



写真8 上野地区 土砂崩落箇所



写真9 双葉ヶ丘地区 民家裏土砂崩落箇所



写真10 仏法寺 裏山崩落シート張り箇所

平成18年7月豪雨災害被害状況

・災害の概要

活発な梅雨前線の影響により、7月15日から降り続いた雨は、時間最大で26mmを記録し、19日午後までに総雨量391mmに達する豪雨となり、この期間だけで7月の月平均降水量の約2倍の降水量となった。

市内は一級河川や中小河川の越水から始まり、山沿い各地区の沢筋から異常出水も発生した。午後には諏訪湖からのバックウォーター現象により一級河川も氾濫、浸水地域は広範囲にわたることとなった。

幹線道路の寸断、高速道路の通行止めによる大渋滞、外部からの流通も不便となり、水防活動や救助活動は困難を極めることとなった。

被害名 期 間	平成18年7月梅雨前線豪雨災害 平成18年7月17日～7月26日(活動期間)
被害状況	・降雨量 連続 391.0mm(15日～19日、一部欠測) 日最大 148.0mm(18日) 時間最大 26.0mm(17日) ・水位 諏訪湖水位 最高水位 2.33m (警戒水位 1.70m) (特別警戒水位 2.00m) ・被害状況 (1) 溢水河川 新川 (氾濫) 上川 (堤防一部漏水) 舟渡川 (氾濫) 武井田川 (溢水) 輪池川 (溢水) 中門川 (一部溢水) 衣之渡川 (一部溢水) (他多数の溢水報告有り) (2) 土石流の発生 中ノ沢川 (7月19日) (3) 土石流発生危険箇所 千本木川 野明沢川 雨沢川 小田井沢川 権現沢川 唐沢川 (4) 建設・農林及び公共施設等被害額 520,781千円

(「釧路市防災会議H19.2.19」資料から)



『自然の「生老病死」』～土砂災害の危険性が過去数年で最も高くなったときなど、特に警戒が必要内容を各号に追加した場合には、巻頭に「生老病死」を付けて、より一層の警戒を呼びかけます。

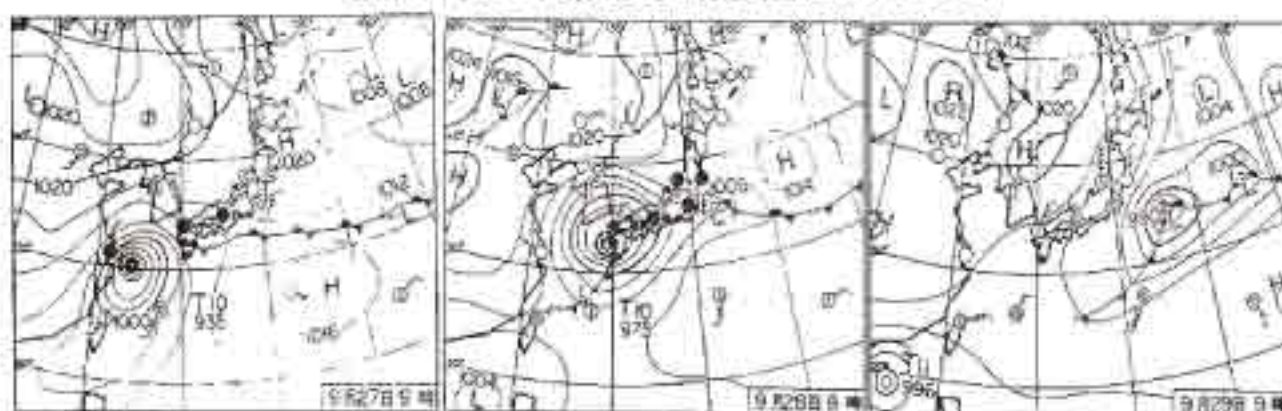
(気象庁ホームページから)

過去の災害との比較

天気図の比較

(気象庁ホームページから)

昭和58年(1983年)豪雨災害時天気図(27日～29日)



平成18年(2006年)豪雨災害時天気図(17日～19日)



降水量の推移の比較(一時間降水量と積算降水量) (気象庁ホームページから)



データで見る過去の災害との比較

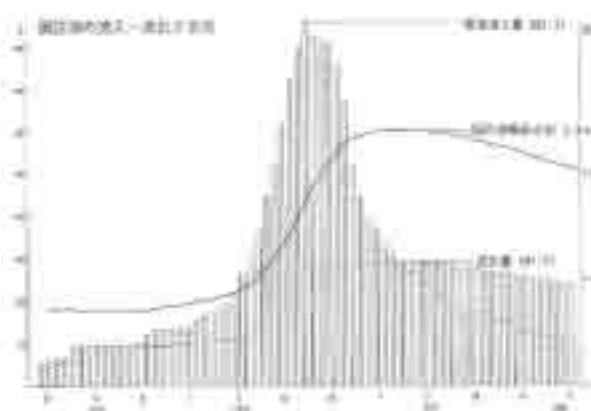
(諏訪市防災会議H19.2.19「資料から」)

被害状況	項目	昭和58年豪雨災害		平成18年豪雨災害	
		データ	備考	データ	備考
気象データ	一時間最大降雨量	16.0mm	28日16:00~17:00	26.0mm	17日
	一日最大降雨量	181.0mm	28日	145.0mm	18日
	期間降雨量	215.0mm	27日~28日	291.0mm	15日~19日
家屋等	浸水面積	550ha		370ha	
	床上浸水	1815戸		492戸	
	床下浸水	2025戸		892戸	
	全壊	10戸		0戸	
	半壊	11戸		10戸	
人的被害	避難指示			9世帯	対象人数 20人
	避難勧告			2445世帯	対象人数 5,573人
	避難総数	742世帯	対象人数 2,113人		
林 業	杉山被害箇所	21箇所	被害面積 3.0ha		
	林道被害箇所	76箇所	路線 15		
農 業	被災箇所	17箇所			
釜口水門	最大流入量	854.7 t		733.05 t	
	最大放出量	287.7 t		413.9 t	
	諏訪湖最大水位	2.4m		2.33m	

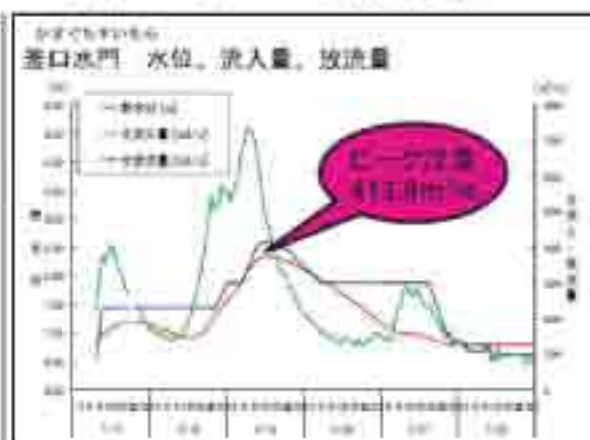
釜口水門 水位、流入量、放出量の比較

昭和58年(1983年)豪雨災害

平成18年(2006年)豪雨災害



(S58年台風10号豪雨災害復興誌から)



(諏訪建設事務所ホームページから)

諏訪湖氾濫による被害一覧表 (諏訪地域)

(諏訪建設事務所ホームページから)

年次	雨量mm		最高水位	浸水面積	浸水家屋	摘要
	総雨量	継続日数				
S25年	316.8	8	1.46m	650ha	不詳	
S32年	123.0	3	1.46m	—	—	前線、台風5号
S34年	146.0	3	1.92m	522ha	2,749	台風7号
S36年	378.0	8	2.53m	779ha	968	梅雨前線
S42年	146.0	2	2.04m	347ha		梅雨前線
S43年	150.0	3	1.41m	—		秋雨前線
S45年	180.0	3	1.47m	—		梅雨前線
S46年	171.0	2	1.33m	—		秋雨前線
S47年	220.0	3	1.40m	—		梅雨前線
S57年 (8)	123.0	3	1.72m	1,113ha	1,374	台風10号
S57年 (9)	156.0	3	1.98m	231ha	1,071	台風18号
S58年	215.0	2	2.40m	1,606ha	4,297	台風10号
H18年	391.0	4	2.33m	560ha	2,541	梅雨前線

平成18年7月豪雨災害

諏訪市消防団活動記録 一覧

月 日	開始時刻	終了時刻	対応時間	主な動きと災害発災内容等	対応状況結果等	対応人数
7 17	8:00	20:00	12:00	団本部立ち上げ 団長は市災害対策本部へ 諏訪市消防団対策本部開設	市内巡回	7名
	10:15	20:00			各分団長に各分団内の防災活動と危険箇所等の点検指示	12名
	10:15	12:20	2:05	1分団 湖岸通りタケヤ味噌付近冠水	現状確認及び監視	10名
	10:15	13:00	2:45	2分団 大手2丁目浸水・末広浸水 日赤前浸水	2号車にて排水活動	12名
	10:23	17:15	6:52	4分団 城南1丁目民家と角上付近浸水	4号車にて排水活動	15名
	10:23	14:30	4:07	7分団 野沢菜センター付近、北福島、福島新町浸水	現場確認及び排水活動	62名
	10:36	21:00	10:24	8分団 新川(南真志野 板倉宅付近)浸水	土嚢積み対応	77名
	10:39	15:30	4:51	6分団 野沢菜センター付近、サンリッツ道路浸水 普門寺道路越水	6分団3・4・5部にて土嚢積み対応 可搬ポンプにて排水14:35 細久保終了スバルへ移動 排水活動	21名 4名
	11:25	15:00	3:35	5分団 小川(安部接骨院付近)浸水	土嚢積み対応	14名
	12:15	13:00	0:45	2分団 大手(寿司源横)床上浸水	土嚢積み対応	6名
						17日 出勤人数 本部12名 1分団27名 2分団18名 3分団48名 4分団45名 5分団75名 6分団77名 7分団91名 8分団77名 合計470名
7 18	15:00	0:00	9:00	諏訪市消防団指揮本部開設(20日迄継続)	災害の把握指示等 資材運搬等	12名
	15:00	16:00	1:00	2分団 日赤から衣の霞は冠水	巡回、確認等	
	15:25	18:00	2:35	7分団 野沢菜センター排水活動開始	排水活動、土嚢積み	14名
	15:25	22:00	6:35	8分団 新川(南真志野板倉宅前)浸水	排水活動、シート鉄杭、改良土嚢積み	
	17:00	19日 19:42	26:42	水戸代団地浸水		78名
	17:00	18:00	1:00	3分団 茶白山シート張り要請	シート張り対応	7名
	18:28	6:00	11:32	清水3丁目旧ローレル浸水	排水活動	34名
	18:30	0:00	5:30	4分団 角上付近浸水	排水活動	17名
	19:00	8:00	13:00	2分団 御蔵溝冠水	排水活動	10名
	19:04	7:00	11:56	6分団 普門寺、細久保、国道スバル付近浸水	排水活動	25名
	19:45	20:15	0:30	3分団 尾玉地区土砂崩れの恐れ有	現場確認 区長へ避難要請 区長指示で5世帯避難	2名
	23:20	0:00	6:40	6分団 神戸山土砂崩れ(10×5m)	特に危険なし区長確認	3名
	23:40	7:00	7:20	3分団 金山地区石垣越水	石垣変形した為 排水活動	11名
	23:56	2:00	2:04	1分団 千本木川付近2世帯	簡保に4名避難	12名
						18日 出勤人数 本部12名 1分団33名 2分団16名 3分団49名 4分団45名 5分団75名 6分団77名 7分団91名 8分団78名 合計476名

月 日	開始時刻	終了時刻	対応時間	主な動きと災害発災内容等	対応状況結果等	対応人数
7 19	0:00	24:00	0:00	諏訪市消防団指揮本部開設(20日も継続) 20日迄 2交代で詰める	災害の把握指示等 土嚢作り等	10名
	0:24	1:40	1:16	6分団 普門寺土砂崩れ	現場確認 シート張り対応	10名
	0:47	2:12	1:25	1分団 湖岸通り 2床下浸水	土嚢積作業	33名
	1:20		1分団	簡保に2家族9名避難	避難誘導	33名
	2:00	3:30	1:30	2分団 衣/渡川河口堰堤越水	付近家屋土嚢積み	8名
	2:18	4:00	1:42	2分団 大手町(わけしめ亭前) 浸水	排水活動	6名
	2:27	3:50	1:23	4分団 城南1丁目 床上浸水	排水活動	31名
	3:03	5:00	1:57	1分団 簡保に追加避難		33名
	3:21	4:30	1:09	5分団 上野道路土砂崩れ	W5×H2.5×2M 確認	5名
	3:37	4:30	0:53	4分団 八十二銀行前越水	付近の住民を起こし注意を呼びかけ	10名
	3:40	4:00	0:20	3分団 角間新田資材置き場浸り水	確認に行く	2名
	3:45	0:00	20:15	7分団 福島新町、河川越水、区全体に浸水	排水活動等	71名
	4:07	0:00	19:53	1分団 富坂、中浜、地区浸水	避難勧告について説明	33名
	5:00		8分団	新川再び越水	排水再開	
	5:00	5:45	0:45	6分団 細久保土石流について建設課と協議	避難を早めに呼びかける	17名
	5:10	6:30	1:20	1分団 千本木川濁流がJR架線に当たっている	土嚢積み対応	15名
	5:14			団本部 岡谷市土石流を傍受以降は携帯電話にて交信を指示		
	5:45		8分団	善光寺、南沢川鉄砲水	確認へ	
	5:55	6:18	0:23	1分団 郷の沢上方崩落の危険あり避難開始	避難誘導	8名
	6:03	15:00	8:57	4分団 舟渡川越水	排水活動 土嚢積み	14名
	6:08		2分団	片羽保育園山側土砂崩落	状況確認	16名
	7:01		3分団	金山地区(舞姫看板付近)越水	土嚢、砂で対応	5名
	7:45	16:00	8:15	5分団 小川サークル裏付近一帯越水	ポンプにて排水活動 土嚢積み対応	40名
	7:51	8:00	0:09	6分団 広瀬橋右岸洗掘 陥没	状況確認	12名
	8:18	13:00	4:42	5分団 新川上流、鴨池川、武井田川全て越水	5号車小型4台にて排水活動 土嚢積み	60名
	8:39	18:00	9:21	7分団 滝沢川越水	土嚢積み対応	11名
	9:30	11:40	2:04	6分団 桑原土砂崩れ	避難指示等	20名
	9:37		8分団	西山公園上土石流発生	西友から目視できる	
	9:45		8分団	華宮橋土石流詰まり県道へ	土嚢の手配	
	11:27	18:00	6:33	7分団 滝沢川土砂の撤去	土砂撤去、交通整理等	36名
	11:34	12:30	0:56	1分団 白山神社付近崩落危険	シート張り対応	20名
	11:54	13:30	1:36	1分団 白山神社付近崩落危険付近避難要請	避難誘導 2分団も応援	30名
	12:18	14:30	2:12	1分団 城北小学校 体育館付近土砂崩落	2分団の応援を得る12:50 シート張り	15名
	12:34	14:00	1:26	5分団 文出 掘水付近 浸水	排水と土嚢積み	15名
	12:36	13:30	0:54	1分団 湯の脇(坂本宅) 浸水	避難後に土嚢積み	10名
	13:35	15:28	1:51	8分団 南沢川、竜妻寺上墓、田無線道路崩落	重機にて土砂撤去 シート張り対応	20名
	14:34	19:10	4:36	6分団 桑原アパート裏土砂崩れ	出水あり確認	20名
	15:00	18:50	3:50	3分団 双葉ヶ丘地区土砂崩れ	シート張り、土嚢積み	18名
	18:07	19:27	1:20	6分団 普門寺裏山から水が出ている	シート張り対応	26名
	19日 出勤人数 本部12名 1分団33名 2分団16名 3分団49名 4分団45名 5分団75名 6分団77名 7分団91名 8分団78名 合計476名					

月 日	開始時刻	終了時刻	対応時間	主な動きと災害発災内容等	対応状況結果等	対応人数
7 20	0:00	20:00	20:00	諏訪市消防団指揮本部開設(18日より継続)	災害把握指示等 市内巡回 排水活動 広報等	11名
	9:00	10:00	1:00	分団長会 招集	対策会議	11名
	11:00	11:50	0:50	5分団 有賀 江音寺上 1号カーブ亀裂	シート張り対応	10名
	11:40	14:00	2:20	7分団 神宮寺裏山(笠原宅)亀裂	シート張り対応後避難して頂く	36名
	12:10	14:00	1:50	1分団 白山神社付近崩落箇所	シート張り対応	15名
	13:18	14:00	0:42	7分団 福島新町 浸水	可搬ポンプにて排水活動	8名
	13:47	14:30	0:43	1分団 簡保下崩れる恐れ	シート張り対応	10名
	15:00	16:30	4:30	2分団 ステーションホテル付近 冠水	2号車にて排水活動	10名
	15:30	18:30	3:00	2分団 わけしめ亭 浸水	排水活動	12名
	15:53	18:12	2:19	1分団 ペルシャ館付近 冠水	1号車にて排水活動	25名
	15:53	17:37	1:44	1分団 富浜公民館付近 冠水	団本部にて排水活動	10名
	18:10	18:43	0:33	3分団 赤羽根公民館上 亀裂あり	シート張り対応	7名
						20日 出勤人数 本部 7名 1分団28名 2分団12名 3分団32名 4分団25名 5分団63名 6分団39名 7分団57名 8分団57名 合計320名
7 21	7:00	20:00	13:00	諏訪市消防団指揮本部開設	避難勧告広報 土砂災害現場確認 各屯所巡回	9名
	5:00	20:00	15:00	1分団 管内危険確認 温泉寺土砂崩落倒木有り	管内巡回・監視 規制線設置	28名
	7:00	21:00	14:00	2分団 管内危険確認	管内巡回・監視	11名
	8:00	19:20	11:20	3分団 管内危険確認 角間新田崖崩れ	管内巡回・監視 シート張り対応	37名
	7:00	18:30	11:30	4分団 管内危険確認	管内巡回・監視	30名
	7:30	19:00	11:30	5分団 管内危険確認	管内巡回・監視	40名
	8:00	17:30	9:30	6分団 管内危険確認 足長神社付近陥没	管内巡回 セッティング、シート張り	48名
	8:00	20:00	14:00	7分団 管内危険確認	管内巡回	55名
	8:00	20:00	12:00	8分団 管内危険確認 中の沢川越水危険 唐沢川土手崩れ恐れ 田無線土砂崩落多数	管内巡回 避難勧告発令 避難の指示 シート張り	66名
						21日 出勤人数 本部 9名 1分団28名 2分団11名 3分団37名 4分団30名 5分団40名 6分団48名 7分団55名 8分団66名 合計324名
7 22	19:30	22:00	2:30	団本部 茶臼山土砂崩れ危険	土嚢積み	10名
	13:00	17:00	4:00	1分団 管内危険確認	管内巡回・監視	6名
	9:00	22:00	13:00	2分団 管内危険確認	管内巡回・監視 茶臼山土嚢積み応援	15名
	12:30	22:00	9:30	3分団 管内危険確認 茶臼山土砂崩れ危険	土嚢積み	38名
7 23 ～ 26				1分団 管内危険箇所確認	定期的管内巡回・監視	25名
				3分団 管内危険箇所確認	定期的管内巡回・監視	50名
				8分団 管内危険箇所確認(26日)	定期的管内巡回・監視	13名
	18:30			災害活動終了	団長指示 自宅待機解除	

諏訪市消防団活動記録 細目

(1) 7月17日

5時10分、長野地方気象台から大雨洪水注意報が発令された。8時過ぎには、越水の通報が入り始め2個分団が水害防止活動に出場する。8時23分には大雨警報が発令され、時間経過とともに市内の浸水箇所が増加、出場分団も増加していった。9時55分に消防団長より全分団に警戒配備命令が出され、全消防団員を招集。10時15分諏訪消防署内消防団室に、諏訪市消防団指揮本部を設置した。10時30分には、諏訪市災害警戒本部が設置され、消防団長は災害警戒本部勤務となり、消防団指揮本部の副団長とともに連絡を取り合い全団員を指揮し、諏訪市消防団全分団が水防活動に入った。非常に強かった雨も14時頃より小雨となり徐々に越水も解消、夕方には活動を終える分団も多かったが、1級河川新川付近の越水は最後まで解消されず、第8分団は夜間までの活動となった。

- ① 第1分団は、郷の沢より溢れた水の対応に迫られた。小河川ながら、住宅内を流れている上に傾斜もきつく、溢れた水は住宅等への敷地内に流れ込んだ。約300袋の土嚢積み工とともに潜水をポンプ車1台、小型ポンプ2台にて排水作業を実施、被害の拡大を防いだ。
- ② 第2分団は、大手2丁目を流れる御蔵溝の増水による越水を解消すべく、ポンプ車1台、小型ポンプ2台にて排水作業を実施。広範囲での浸水のため、各家庭や事業所前に土嚢積み工をし、被害の拡大を阻止した。
- ③ 第3分団は、清水付近の湛水をポンプ車にて排水作業を実施。傾斜地の用水路等でも水が溢れ住宅等に浸水したため、それぞれに土嚢積み工やシートにて対応。さらに、山の神地区では河川脇の土手が崩れ始めたため、シート張り工にて土手を保護、二次災害の防止も実施した。
- ④ 第4分団は、城南地区、上川地区等で小河川から溢れ越水した箇所にてポンプ車1台、小型ポンプ3台を使用し排水作業を実施、各住宅への浸水を少しでも防ぐべく土

嚢積み工にて対応した。諏訪湖畔沿いにある諏訪赤十字病院前の湖周線も湛水し、市民病院でもある日赤への交通を確保すべく、団員の懸命な排水作業が行われた。

- ⑤ 第5分団は、1級河川新川に流入する小河川の越水による、公設市場付近の湛水を、ポンプ車1台、小型ポンプ4台にて排水作業を実施。河川沿いに土嚢積み工を実施し、被害の拡大を防止した。
- ⑥ 第6分団は、赤沼地区、飯島地区、等数箇所での越水に、ポンプ車1台、小型ポンプ5台で排水作業を実施。必要箇所には土嚢積み工も行い被害の拡大を防止した特に国道20号線上や、インターチェンジから市内への道路も湛水を始めたため、主要道路の確保のため懸命な水防活動を実施した。
- ⑦ 第7分団は、中金子、福島、福島新町、工業団地等複数の浸水に、ポンプ車1台、小型ポンプ4台で排水作業を実施。必要箇所に土嚢積み工も行い被害の拡大を防止した。諏訪南中学校グラウンドにて更なる災害に備えて土嚢を作製し備えも怠らなかった。
- ⑧ 第8分団は、1級河川新川の増水による湛水を、ポンプ車1台、小型ポンプ4台にて排水。欠堰や越水に備えて土嚢積み工を約50mにわたり実施した。以前から越水被害の出やすい場所だけに、今回も大雨警報発令前から水防活動を実施、長時間にわたっての活動により被害の拡大を防いだ。

(2) 7月18日～20日

18日は朝から弱い雨が降っていたが、午後に入ると雨脚が強くなり、前日までの雨の影響もあり、急激に市内のあちこちで被害が発生。15時05分に消防団指揮本部を設置するとともに全分団が活動を開始する。多発する被害により18時には諏訪市災害警戒本部も災害対策本部となった。19日昼頃まで降り続いた雨に各分団ともに懸命な水防活動を実施した。雨が止んだ後でも諏訪湖からのバックウォーター現象もあり、浸水は市内のあちこちで続いていた。また、緩んだ土砂による、河川への被害も多く水防活動は困難を極めた。18日15時頃から20日の夜まで、昼夜を問わず長時間の水防活動が続いた。20日には

湛水は残るものの、市内はだいぶ落ち着きを取り戻した。19時23分には各分団に、屯所待機の解除と自宅待機の命が下りた。指揮本部も20時10分に解散し自宅待機となった。

- ① 第1分団は、ポンプ車1台、小型ポンプ2台にて、越水箇所への排水作業実施。また、小規模ながら多数にわたる土嚢積み工も行い、住宅等への浸水を防ぎ、小河川からの越水被害を最小限にとどめた。また、河川に崩れ落ちそうな土手のシート張り工も行い土石流の発生を未然に防いだ。千本木川の土石流の発生危険。諏訪湖付近の大規模な湛水による住民避難にあたり、1名の人的被害も出さずに5地区623世帯、1,406名の住民を避難誘導し、120cmもの水深となった富浜区からは、4名の孤立老人をゴムボートにより救出した。
- ② 第2分団は、ポンプ車1台、小型ポンプ2台にて、越水箇所の排水作業実施。各住宅への浸水を防ぐべく土嚢積み工を実施。一級河川衣之渡川河口でも越水を防ぐべく土嚢積み工を実施。諏訪湖の水位上昇により越水したものの、住宅等の浸水時間を大幅に短縮し、被害を最小限にとどめることができた。また、避難勧告の出た10地区893世帯1,968人を避難誘導し、取り残され孤立していた2世帯4名もゴムボート等により救出。
- ③ 第3分団は、山の手も管轄にあるため傾斜の強い水路からは勢いよく水が溢れ、普段水路でない箇所までも水路と化した。このために土嚢、シートにより水路の溢れを抑え、住宅等への浸水を防ぐ活動が多発した。また、平地部ではポンプ車1台、小型ポンプ4台にて湛水箇所を排水した。土砂災害の防止活動も多く、数多い現場で大きな災害となる前に水防活動により被害を防止した。
- ④ 第4分団は、ポンプ車1台、小型ポンプ3台にて管轄内の湛水箇所を排水。あわせて、住宅等への浸水を防ぐべく土嚢積み工を行なった。管内に一級河川が多数通っており、諏訪湖からのバックウォーターでは、河川沿いへの土嚢積み工も実施した。上川では、水位の上昇により用水路の流入口よ

り逆流を始めたために、シート張り工や月の輪工にて湛水を防止した。また、避難勧告にあたっては5地区596世帯1,351人を1人の負傷者も出さずに無事避難誘導した。大きな河川が多く、一つ間違えば大きな被害となる地域で、被害を最小限に抑えた。

- ⑤ 第5分団は、諏訪湖沿いの管轄のため、広い箇所での湛水となった。ポンプ車1台、小型ポンプ5台にて排水作業を長時間にわたり行なった。河川の増水にあわせて土嚢積み工も越水防止のため行なったが、諏訪湖からのバックウォーター現象では舟渡川が氾濫、武井田川、鴨池川が越水し、河川沿いの土嚢積み工では防止することができず、各住宅等の周りに土嚢積み工を行い、少しでも被害を軽減するよう活動した。広い越水のため、道路と水路等の境がわからなくなる箇所も多く、立入り禁止テープを危険箇所に設置した。このために、人的被害はもちろん、走行中の水没車両等の被害も防止することができた。
- ⑥ 第6分団は、ポンプ車1台、小型ポンプにて、排水作業を実施。住宅周りに土嚢積み工を行なうとともに、小河川や用水路の溢れに対してもシートや土嚢を使用して水防活動を行った。管内での何箇所もの越水に対応したが、特に国道20号や、20号バイパスといった幹線道路の湛水に対して、主要道路の交通を確保すべく懸命な水防活動を行った。また、以前には土石流により大きな被害のあった管内でもあるため、危険箇所のパトロールにも重点をおき、早めに対応、対処できるよう活動した。早めの土嚢積み工等の処置により、被害を最小限に抑えた。
- ⑦ 第7分団は、ポンプ車1台、小型ポンプ5台にて排水作業を実施。管内数箇所の越水箇所でも土嚢積み工とともに排水作業を行い被害を軽減した。諏訪大社上社横の河川が増水し、主要道路に土砂とともに流出したが、土嚢積み工により、住宅等への浸水を阻止し被害を最小限に抑えた。また、7分団管内の福島新町は市内でも浸水しやすい地形となっているため、遅くまで浸水することとなったが、少しでも被害を軽減す

べく長時間にわたる水防活動を実施した。

- ⑤ 第8分団は、ポンプ車1台、小型ポンプ5台にて排水作業を実施。一級河川新川沿いの越水箇所にて長時間にわたる排水作業、改良土養積み工、土養積み工を実施。上流の団地では、早めのポンプによる排水作業のために住宅への浸水を防いだ。山間部にある後山地区では、8分団第5部が各沢沿いに土養積み工を行なうとともに、洗掘した河川に木流し工を実施被害の拡大を防止した。住民の避難誘導でも、1地区118世帯339人を1人の負傷者も出さずに無事に避難させた。特に土石流の発生した中ノ沢川では、事前に団員のパトロールで流水によりダムと化した箇所を発見河川沿いの住民を避難させた。土石流の発生箇所はもっと上流より発生したものだったが、結果的に土石流が発生し避難勧告が出る前に周辺住民を避難させることとなった。

- ⑥ 団本部は、17日夜に解散した諏訪市消防団指揮本部を18日15時05分に再び開設。長時間にわたる指揮、情報収集、水防活動を統率した。消防団長が諏訪市役所に開設された諏訪市災害対策本部に常駐。その団長や、消防署と連絡を密にしながら副団長の下、各分団を指揮した。災害のピーク時では所有する小型ポンプで排水作業も実施し、各分団への資機材の搬送等により災害の被害を軽減した。

(3) 7月21日

前日20日の15時16分に一旦解除されていた大雨警報だったが、21日11時15分に再び発令。この日も朝から、避難勧告、避難指示による住民の避難誘導や、排水作業により、長時間の水防活動となった。

- ① 各分団ともに、ポンプ車、小型ポンプを使用し内水の排除活動を実施した。
- ② 第6分団では、避難指示の出た9世帯、20人を避難誘導した。第8分団では避難勧告の出た2地区199世帯573人を避難誘導し、いずれも1人の負傷者も出さぬまま避難させた。
- ③ 小中河川においては、再び越水のないよう、流木等の除去や堆積した土砂の除去も

実施した。

- ④ 各分団とも定期的に危険箇所のパトロールを実施、二次災害の防止に努めた。
- ⑤ 消防団指揮本部は7時35分に再び開設、17時10分に自宅待機となるまで活動を続けた。

(4) 7月22日

工法等を伴う水防活動は少なくなり、危険箇所のパトロールや災害処理活動が主な活動となる。

- ① 市内での工法を伴う活動は、2個分団による河川補修、及び三分団による石垣への土養積みのみとなる。
- ② 各分団は、定期的にパトロールを実施し、二次災害に備えた。
- ③ 6時30分に中央自動車道が全面開通。徐々に交通状況も良くなり始める。
- ④ 10時09分、大雨、洪水警報が解除される。
- ⑤ 10時10分、市内に出ていた避難指示、避難勧告の最後の地区が解除され全ての住民が自宅に戻る。

(5) 7月23日以降

消防団は危険箇所パトロールや災害処理活動のみとなり、消防団指揮本部は設置されずに分団ごとに活動を行った。7月26日にはパトロール結果にて、緊急の危険性はないものと判断し、団長指示により自宅待機を解除し、諏訪市消防団としての災害への活動を終了した。

- ① 各分団は、定期的に必要箇所をパトロール実施。
- ② 土養の片付け作業等、災害処理活動も実施。
- ③ 7月26日18時30分、団長命により団員の自宅待機解除。平成18年7月豪雨災害への活動を終了する。
- ④ 7月28日17時、諏訪市災害対策本部が諏訪市災害警戒本部となる。
- ⑤ 8月4日16時15分、諏訪市災害警戒本部が諏訪市災害復旧連絡室となる。

寄稿 平成18年7月豪雨災害

<区民>

豪雨水害時の活動と対応について

福島新町区長 齋藤 幸雄

18.7豪雨災害は“災害は忘れた頃にやってくる”の格言どおりにやって来ました。五八災害以来22年振りに襲われた今回の水害は、福島新町区創設以来最大の災害であり未曾有の大災害でした。この、自然の猛威に対し区行政として打つべき手は殆ど無く、無力感をひしひしと感じた瞬間でした。

今回の大水害の発生を思い返して見ますと7月16日夜は福島区との役員懇親会がありほろ酔いで歩きながら雲の切れ間の星空を見上げ、天気予報は雨になっているが大丈夫かなーと話しながら帰宅した。17日未明より降りだした雨は18日もやまず降り続き大雨となった。

17日は午前7時より内水排除ポンプNO.1を手動運転、2・3を自動運転し、様子を見る。18日は午後2時30分よりポンプアップするも流入量多く落水川の水位は上昇が続く状態であった。夕方NO.2ポンプ周辺の水位が高くなりポンプの能力不足が目立つようになったので消防団7分団にポンプ車の出動を要請した。午後7時ポンプ車到着。早速排水作業に入ると共に、水が溢れだした渋抜川の土嚢積み作業を実施して頂き、引き続き19日午前1時まで続行して頂いた。しかし、この頃には落水川・渋抜川の逆流が始まっており、現在の設備器具では如何ともしがたい状況になっていたため排水作業を止め、警戒のみを続ける事とした。

19日午前3時区内を巡回してみると道路はすべて冠水し低い場所で50センチ、高い場所で20センチ位の状態であった。消防団ではこの頃より車の移動を呼びかけていた。午前9時防災本部設置。今後の対応検討、役員手分けして老人宅訪問、午前10時3名公民館へ避難する。区内の水位上昇に伴い内水排除ポンプ1号機は制御盤が水に漬かり漏電のため作動せず2号機も自動運転せず手動に

切り替えるも能力不足のため排水できず、3号機も渋抜川の水位高く機能せずの状態で落水川・渋抜川の逆流と共に全ての側溝が逆流水路となり、道路が川となり、庭先が池となり、玄関の水位が徐々に上がってくるのを只見ているだけで昼過ぎに雨が止んでも水位の上昇は続き、最高水位に達した後も只諏訪湖の水位低下を待つのみ、という状態であった。午後10時になっても水位は変わらずピーク状態が続いた。この夜は避難者3名と安全衛生委員長、区長が公民館に宿泊した。

20日午前4時頃水位が20センチ程度下がり、少し安堵した。午前10時建設業協会より借用のエンジンポンプ1台、電気ポンプ2台でポンプアップ。又、内水排除ポンプ1号機も回復したので手動運転、2号機も手動運転にて排水作業を開始した。並行して消防団7分団に消防車の出動を要請。午前11時より消防車による排水を開始した。区内の被害状況の調査を組長に依頼し、集計の結果は次の通りであった。

床上浸水	40戸	22%
床下浸水	111戸	61%
庭先浸水	31戸	17%
計	182戸	100%

午後6時 全ての排水作業が終了した。

22日午前10時 県職員ボランティア250名が救援に來区、各組に分散の上、救援作業を実施していただいた。老人家庭が多いので大きな戦力となり、大変有り難く感謝の気持ちでいっぱいでした。

22～25日まで市による殺菌・殺虫消毒が実施され、衛生面でも万全を期することが出来た。

8月5日役員会を開催し、水害時の問題点と対策について検討の上、災害対策本部を解散した。又、検討の結果は“18.7豪雨災害に伴う要望書”として8月17日市長様へ提出説明を実施した。要望項目は次の通り。

- 1 国・県へ要望して頂きたい事項
 - 1) 釜口水門の排水量の増加と天竜川の改善
 - 2) 諏訪湖の浚渫の再開による湖水面の上昇改善
- 2 市行政への要望事項
 - 1) 内水排除ポンプの抜本的改善の早期実施

2) 河川増水による区内への浸水箇所改善の
早期実施

3) 被害家屋の復旧支援制度の強化

又、区としては水害時の対応を明確にしておくため、水害対策マニュアルを作成し、防災規程を整備充実した。

尚、今回の水害に対し県のコモンズ支援金の交付が決まり防災備蓄倉庫・防災用トイレ・水中汚水ポンプ・エンジンポンプ・発電機・副長等の設置・防災放送設備の更新等の事業ができたことは今後の防災対策面では一歩前進出来喜んでいるところであります。

又、今回の災害に際しては、消防団7分団の団員皆さんの不眠不休の救援活動に対して又、県職員ボランティアの皆さんの休日を使っている救援活動に対して、更に、市職員の皆さんの献身的な防虫・防除活動に心より厚くお礼申し上げます。以上

<団員家族>

2007水害を振り返って

塩原 たか子

昨年七月十八日の二十三年ぶりの大災害であった梅雨前線豪雨は今でも鮮明に覚えています。雨は深夜になっても止もうともせず降り続き、家の前の道路はすでに膝上までに達していました。もともと我が家は湯の脇でも低いところにあり、強い雨が降ればすぐに水がつくところなので、消防団員の方々もちょくちょく駆けつけてくれて、土嚢を積んだり夜もほとんど寝ないで様子をみていてくださいました。次の日、雨が上がってようやく落ち着いたかと思っていましたが（まだこの時は床下までだった）水は一向に減る気配もなく、逆にこれからもっと水が増えると消防団から聞き、家族全員で大慌てで畳を上げたり押入れのものを二階に上げたりしました。そうこうしている内に水かさも増えていき、とうとう床上浸水にまでなってしまいました。

消防団員の方々にポンプ車で排水していただいたりしましたが、元の諏訪湖の水位が下

がらないとどうにもならないということで、改めて自然の力には人間はかなわないと痛感しました。

地元消防団員の方々は本当に苦勞していただき感謝しています。何日もほとんど眠らず警戒、救助等で大変だったと思います。地域の人々がお互いに支え合い、助け合っていく絆の大切さ、その核となる消防団という存在が重要ということを改めて考えさせられました。最後に、消防団の皆様のご健康を心よりお祈りいたします。



湖岸通り2丁目付近 国道20号線

七月豪雨災害を経て

油井 康江

七月の災害から四ヶ月。やっと床上浸水の被害にあった一階の修理が済み、徐々に元の姿に整えているところでございます。二日も雨が続きと夜中に目覚め窓の外を覗くという事もなくなり心も少しずつ落ち着き、幼子（二歳半）も情緒が安定して参りました。そして当時の新聞写真や豪雨災害のチラシを目にするに、他の地域における被害も凄まじかったのだと改めて知る事となりました。

そんなある日この原稿を依頼され、再び思い出し涙してしまいました。

消防団員の妻となり四年半、操法練習・大会、お盆・花火・年末警戒など年間を通じ任務を見守ってきました。思えば、夫不在を我が子と二人寂しいながらも気ままに過ごして来られた事を思うと、何て平穏であったのだ

なあと改めて思わざるを得ません。

続く雨・・・梅雨時・秋の長雨の頃を思えば、「またかあ」と特に気にせず過ごす中、七月十九日前々夜、主人から「屯所に泊り込みの警戒になる」と聞かされ、ただの大雨でないと危機感を抱いた事を思い出します。翌日主人は仕事を中断し再び警戒に当たりました。

七月十九日夜明け前ふと目覚め、窓から外を覗くとお向かいさんの合羽姿が目に入り「水がくるぞ～荷を上げろ～」の言葉に玄関に出ると、道路が川となり水が迫っていました。二十数年前、諏訪湖の氾濫の微かな記憶がありましたが、「二年半前新しくはありませんが全財産を擲って手に入れた我が家が浸水するはずはない。」という願いも含む思いから、何も行動することが出来ませんでした。近くに住む主人の父と主人が玄関にシートを張り土嚢を積み、車を避難してくれました。そして、浸水しない事を祈りました。しかし、水は玄関へ浸水し駆け付けてくれた家族・親戚の掻き出し作業により玄関は外より十センチ位低く留まりました。はしゃぎながら起きてきた我が子も黙り何かを感じていました。大勢の力のお陰で荷を二階三階に出来る限り運べ、諦めを皆に伝えました・・・一階は見る見るうちに膝まで浸水していきました。一階に二棟の嫁入り箆笥があり、「(夫)を呼べ」と家族に言われはじめて夫を当てにしているのだとはっとしました。(消防団員の夫は皆の老で当てにしていけないと思い遠慮していた所がありました。)

間もなく夫と他の団員の方五、六人が、箆笥を上げる為に集まって下さり、年甲斐もなく涙が溢れ止まらなくなってしまいました。何かの糸が切れてしまったようでした。

自宅へ戻れず母子ともに眠れない夜を明かし、「今日朝のうちに水が引く予定」との夫の言葉通り24時間余り浸水した汚水は見ると無くなり泥だらけの床が露になりました。

家族・親戚の方の力により我が家はあっという間に掃除が終わり、ふと息をつくときの中にはテレビの中の黙々と方付ける被災者の姿がありました。テレビの中の出来事と思っ

ていた私は正直唖然としました。実家も市内にあり皆がゴミ運びに駆け付けてくれました。

そして自宅でないと泣き眠れない我が子の為、一心に寝床の荷を退けました。本当に心より大勢の力に感謝しております。

夫が帰宅できた暫く後に、管内で土砂災害の危機により夫に出動要請があり出かけていきました。岡谷の浸地区で亡くなられた団員の方を思い起こし、つい行かないでと口にしてしまった自分・・・いつかそんな時黙って「行ってらっしゃい」と言える妻になれるでしょうか・・・

今後も異常気象による自然災害は逃れられないにしても、今回の様に浸水被害が拡大しない様、水門より規定量放流できる方法、下流域の改修工事を早急に望まざるにはいられません。・・・

私たちの家屋は、床上浸水にとどまり、浸地区川岸地区で土砂により家を失われた友人宅を含め多くの方々に比べればほんの少しの被害・・・ですが、二度と忘れられない出来事・・・今後に課題として、繋がることをねがいつつ・・・七月を振り返らせて頂きました・・・



大手1丁目付近

<消防団員>

豪雨災害活動を通じ

第五分団副分団長 宮 阪 孝

七月十八日から十九日午前にかけて諏訪地方は記録的な大雨が降り続いた。十八日、新

川の河川氾濫に加え諏訪湖の水位が上昇、流れ込んだ水が逆流し、新川へ続く用水路は行き場を失い、浸水や冠水が相次いだ。

出動指令指示のもと、分団長は被害が大きい湖南南真志野地区応援の指揮、私は新川下流の有賀区市場付近の警戒作業についた。

各部団員を集結し豊田小学校砂場にて土嚢作りを行い、連絡をとりながら、土嚢積み、冠水の排水作業を行った。土嚢作りが終わる頃には、あたりは暗くなり、雨はやむ事無く降り続いていた。そして深夜に及ぶ警戒作業が始まる。

分団長と合流し冠水の排水作業を終え分団本部屯所に帰ったのは、すでに十九日になっていた。雨はまだ降り続く、不安と緊張の中、本部屯所で朝を迎えた。明け方岡谷消防無線から聞こえてくる事態で更なる不安と動揺がはしる。これから起こりうる災害への不安。自分たちの地域は今どの様な状況になっているのか？情報の収集をして全体の状況を把握するように努めなければならない。自分たちの目で見て実態をつかむ事が一番である。分団長の指示のもと分団ポンプ車で巡回を開始。巡回を始めてすぐに無線が入る。有賀区舟渡山公園土砂崩れ。上野区では追い討ちをかけるように土石流発生。沈着冷静な態度でいなければと思いつつ非常時の様な種限状態は人を追い詰め、行動を縛り付ける。

駆けつけた上野県道の発生現場は土石流が流れ込み、なぎ倒された土砂や流木で寸断されていた。ここで改めて天災の怖さを痛感し、何もできない状況のまま折り返し有賀峠を下った。有賀区ひだまり付近冠水現場へ向かい土嚢を積みながら排水作業を開始した。

水位はさがるところかみるみるうちに上がり、建物は水に浸かりはじめた。

そして・・・

二十一日まで豊田全域にわたる第五分団の「総力戦」が続いた。土嚢積み、土砂の除去作業、冠水の排水、交通整理、避難誘導など使命感に裏打ちされた消防団員の活動は、地元住民との協力なくして防災・災害活動は成り立たないことを今回の災害を体験し特に感じた事である。地域を愛し地域を災害から守る。消防団員はその地域に住んで地域と深い

かわり合いがある。地域に密着して献身的に活動する消防団でしかできない力である。

「団結と和」災害活動を通して生まれる団員同士の連帯感と団結心を強く実感した災害活動であった。



豊田地区の浸水

集中豪雨の猛威

第六分団団長 矢崎恒彦

7月16日から降り続いた雨は、3日目になっても降り続いていました。私はいつもどおり会社に行き普段どおりの生活をしていましたが、この雨が一生記憶に残る大災害になるとはこの時は考えてもいませんでした。

7月18日夕方、分団長より連絡が入り豪雨による出動命令を受けすぐに団員に緊急召集をかけました。私が屯所に着いたときは既に4人の団員が出動の準備をしていて、スコップや土嚢袋そして既に日が沈んでいた為、投光器と発電機も積載に乘せ出動しました。現場は国道20号線付近で、道路は川のように冠水し深いところでは70cmほどありました。状況を確認しポンプによる排水作業と土嚢の準備に取り掛かりました。日頃の訓練のおかげで、はじめはスムーズに作業を進める事が出来ましたが、時間が経つにつれ雨脚が強くなり状況は悪化し、無線や携帯電話に次々と各地の被害の状況が入ってきました。

記録的な豪雨によって大量の水の行き場所が無く、諏訪の平地はそこら中で水が溢れていました。数日前は、考えもしなかった事態

が起こっている。そして、この雨は確実に地面に大量の水を吸収していました。

眠気か疲労で雨も気にならなくなり、気付けば排水作業も何時間か経っていました。そして、辺りが明るくなり始めた頃には雨も小降りになってきましたが、水位はほとんど引く気配はありませんでした。

更には、明るくなるにつれて被害が明確になってきたのです。大量の雨を含んだ地面が耐えられなくなり至るところで崩れ、私たちの部だけでも土砂崩れの報告が立て続けに4件入りました。アパートのすぐ裏の土手が崩れ落ちアパートの玄関を塞いだり、住宅の裏山の斜面が崩れ立木が数本根こそぎ倒れたり、中でも一番大規模であったのが、仏法寺上の斜面で幅20m長さ100m以上の土砂崩れが起こっていました。まさに危機一髪、民家のすぐ横が崩れておりこの光景を見たときは言葉を失いました。すぐに区の役員と相談をし、危険と思われる付近の住民に自主避難を呼びかけ、公民館に避難してもらいました。しかも現場の下には川が流れていて、土砂が再度崩れると川がせき止められ鉄砲水となる恐れもあり、しばらく現場の監視を続けました。私たち消防団員は、このような状況の時こそ冷静に落ち着いて区民の方と接しなければ日頃の消防活動に意味が無いように思います。この日の夜は前日の徹夜作業もありましたので、深夜の警戒を当番制で数時間おきに危険箇所の警戒を行いました。

7月20、21日は住宅付近で起こった土砂崩れの片付け作業と危険箇所の見廻りを行いました。そして、新たに二箇所の土砂崩れが発見され、そのうちの一個所は民家の無い山の方で見つかりましたが、土砂が川をせき止め土石流になる可能性を考え、定期的にこの場所を警戒することにしました。

豪雨から数日経っても広がる被害に、災害の恐ろしさを感じながら警戒を続けていると18日に起こった仏法寺上の土砂崩れで、中腹辺りが盛り上がり始めたため、再度土砂崩れの危険性があると、市の災害本部から避難指示が発令されました。付近の住民は2度目の避難を行うことになりましたが、土砂は重機により撤去されその日に避難指示が解除されま

した。

今回の豪雨災害で、訓練ではない本当の災害に直面し自然の猛威に恐怖を感じました。今でも、雨の日はこのときの災害を思い出します。今回の経験を次の代の消防団員に受け継いで行きたいと思います。

災害はいつ襲ってくるかわからない。いざと言う時に慌てず冷静に行動ができるような消防団員になりたいと思います。



藤原アパート裏 土砂崩れ

七月豪雨災害を振り返って

第七分団副分団長 矢島 裕一

分団長から、「七月豪雨災害の原稿を書いてくれ。」と言われ、文才の無い私はほとんど困ってしまったが、芸歴十四年目にして起こった最大の出来事を記録として残してもらえるので、がんばって書いてみたいと思います。

七分団は、七月十七日から出動していました。雨による増水のため、野沢菜センター前の用水路と、福島新町区と北福島区に本部及び各部を派遣して、ポンプを使っただけの排水作業を行いました。この日の出来事は以前にも何回か有り、特別に驚くことではありませんでした。この程度の内容なら、以前に起こったホテル地下駐車場に溜まった水を排水した時の方が、何倍も大変だったからです。こうしてみると七分団は、毎年と言ってよいほど水害で出動しています。

明るく日、雨の降り続く音を聞きながら仕

事をしていたら携帯が鳴りました。分団長からの電話です。内容は、野沢菜センター前の用水路が溢れているから出動との事でした。内心またかと思いましたがこれもお勤めです。二日続けての出動となりました。現場についてみるとものすごい勢いで水が流れています。とりあえず、ポンプ車と可搬ポンプを使い排水作業を始めましたが全然効果がありません。いつもなら徐々に減っていくのに逆に増えていきます。分団長と相談し、土嚢を作って対処することになり、私が土嚢づくりの責任者として諏訪南中学へ向かいました。訓練ではたくさん作ったことはありますが、実践では初めてです。ましてや、南中に行ったはよいが袋に詰める砂もありません。結局は校庭の隅っこにある土を掘り起こして袋につめて作っていましたが、さすがにらちがあかず、砂を持ってきて欲しいと依頼をし、作業をすすめていました。その間に、中洲地区は例のごとく福島新町区と北福島区が騒ぎとなっており、最寄の部が出動し排水作業を行っていました。

ようやく土嚢づくりが終わり、分団長に報告したところ、次の指示は福島新町区と北福島区に行つてほしいとの事。軽トラックで現場に向かい到着後、警護班長に様子を聞いてみると、昨日よりひどいとの話でした。内心やばいなと思いましたが、今はただ、ポンプを回して排水する事しかできませんでした。ある部では古いポンプまで持ち出していました。水は一向に減ってはくれませんでした。逆に増えているように感じました。出動している部長、地元で待機している部長に交代で食事をするよう指示をしたり、筒先を持っている団員を交代させたりと慌しく動いていると、時間はあっという間に過ぎていきました。

分団長が合流したのは夜中でした。この頃になると雨足も一段と強くなり、排水作業は何の役にも立たず、虚しくエンジンの音が響いているだけです。団員たちの疲労も目に見えてわかるようになってきていました。こういった状況ではどのような指示を出せばいいのか考えましたが結局は、交代しながら休みながら作業してくれとしか言えませんでした。

徹夜となり翌日も眠たい目を擦りながら、神宮寺区で起きた川の氾濫に対する作業で、

土嚢づくりを団員たちとやっていたときに、ある団員からの一言で私がムッとしてしまい、その場の空気が悪くなってしまいました。今にして思えば団員達も徹夜で作業をし、疲労困憊の中で土嚢を作っていると言うことを理解し、もっと冷静に対処すればよかったと思います。今回の活動中、一番の反省点でした。

水害に伴う特別警戒は三日間続き、屯所に三泊するという経験もしました。今回の水害では私にいろんな教訓を与えてくれました。今回の指示はそれで良かったのか？しっかり周りを見て行動しているか？数え上げたら切りがありません。しかし、また同じことがあったら今回よりは適切な指示、行動が出来る分団役員になれるように、これからの活動をしっかりとやっていきたいです。

最後に、団員としては当たり前のことかもしれないけど、仕事を休み、自分の家が床上床下浸水していたにも拘らず、活動をしてくれた団員に心からお礼を言いたいと思います。



サンリツロード

そして水害へ

第八分団部長 藤 森 鉄 哉

平成十八年度の消防活動は、波乱の幕開けとなった。不審火と思われる火災が相次いで発生した。八分団管内では資材置き場から始まり、最終的に母校である中学の体育館が燃やされた。その他諏訪全域での不審火も含めると、尋常ではない件数が記録された。全国ニュースでも扱われ、諏訪全域で警戒体制が

布かれた。毎晩行われる警戒は苦痛を極めた。

およそ三ヶ月に亘る不審火騒動も、犯人と思われる人物の逮捕により、一応の収束を迎えた時にはすでに六月になっていた。操法も終わり、部長職の三分の二を終えたつもりでいた。そして・・・

七月十七日。数日前から降り続く雨は強さを増し、朝からの嫌な予感的中した。この日は海の日で月曜だが休日だった。朝九時頃、副分団長からの連絡により出動。その日からまさか一週間も、水害による活動が続くとはこの時はまだ思いもしなかった。

この日から消防活動の限界を超えた活動が始まった。特別警戒が解除されてからまだ二週間だった。活動を始めた当初は、まだ比較的やり慣れた仕事だった。そこは毎年一度は水がつく場所で、新川に向かっての放水作業を各部手分けして行うものだ。ただ雨の量はまったく衰えずに降り続いていることが、いつ終わりになるのだろうかという不安を募らせた。予報によると雨はまだ降り続くということ。この時ある程度の長期戦を覚悟した。

この今回の水害で最も労を費やしたことは、やはり土石流だったと思う。この水害では本当に色々あって、体験したことのないことばかりが大半を占めた。その中でも土石流の衝撃と疲労は、他の作業の中でも群を抜いていた。その土石流は私ともう一人の前部長の目の前で起きた。

警戒に当たっていた私と前部長が、ちょうど山の手前にある小さな用水路で作業をしていたときに土石流は起きた。用水路の中の水が濁り、すぐに泥になり、山手を見上げたときには道一杯に広がった大量の泥が目の前に迫っていた。すぐ下を流れる中ノ沢川では、雷に似た爆音とともに何かが流れていった。逃げるように山を下り、県道沿いまで下りたときには道中泥だらけだった。

その惨状をみてさすがに足がすくんだ。色々な情報が飛び交う中での状況判断は困難を極めた。今出来ることと、しなければいけないことが混同し、泣きたくなくなる気持ちをおさえ、とにかく怪我人を出さないことを最優先事項とした。部長として、そして人として今できる最大限のことを考え、実行した。人間

一人一人が出来ることは微々たるものだが、組織的に動ける消防団は心強いものだ。この時強く痛感した。結果、怪我人など犠牲者はゼロ。陳腐な言い方しかできないが、本当によかった。

今回の水害がようやく収束を迎える頃、雨は上がり今までの雨が喰みたいな晴天が広がった。解散が宣言され、ホッとする間もなく、次の日には後片付け地獄が待っていた。ただ被害に遭われた方々に比べればどうってことの無いものだった。落ち着いてきてから入ってきた情報は、本当に悲惨なものが多すぎた。多くの人がこの水害に泣かされたと思う。

今回強く思ったことは、「若者の力」だ。同じ消防仲間にはより強い信頼関係を築けた半面、ところどころで野次馬に来ていた若者には、腹立たしい場面がいくつかあった。もし、少しでも自分にも何かできないかと思うところがあるのなら、この場を借りて一緒に活動しようと言いたい。

全てを一言で言えば、よい経験をしたに尽きる。この経験は消防だけでなく、今後の自分の人生にも必ず生きてくると思う。この先自分がどれだけ消防団として携わっていけるかわからないが、自分を育て、育んでくれたこの諏訪の大地に感謝し、そして貢献していきたいと強く思わせてくれた出来事だった。



中ノ沢川 警宮橋

対談：豪雨災害を経験して

今回の豪雨災害について、正副団長・分団長の皆さんに振り返ってもらいました。

〈〆長〉 全体を振り返る中でお話を伺っていきます。豪雨は7月17日からでした。確か前日に八分団で火災がありましたね。

〈八分団長〉 連続不審火の警戒の緊張を解くことが出来た矢先の火事で、正直参りました。それに続く豪雨の対応でしたから大変でした。17日の活動は新川の増水の対応でしたが、ここは大雨のときには出動することが多いので、この日もまたかといった感じでした。何より、年度の初めからの度重なる出動にもかかわらず、団員たちが懸命に活動してくれたので感謝しています。

〈〆長〉 大雨の時、決まった場所に水がつくことは良くありますが、七分団管内でもそんなところがありますよね。

〈七分団長〉 定番で言えば 野沢菜センターや諏訪インター付近ですね。諏訪インター付近はずいぶん排水設備が整ってきて、最近は少なくなりました。

〈〆長〉 いつもの大雨かなと始まった災害活動でしたが、違うところもありましたね。まさかその後1週間にもわたる災害対応になろうとは思いませんでした。翌日の18日は平日の召集でしたが、二分団はいかがでしたか？

〈二分団長〉 二分団は、お昼過ぎの立石町への出動からでした。前日の17日にも出動していて、「明日は無いよね」なんて話もしていたのですが、まさか、あんな大災害になろうとは思っていませんでした。

〈〆長〉 このように災害活動が始まりましたが、皆さん、あわただしく活動をしていた中で、休憩や食事なんかはうまく取れましたか？

〈四分団長〉 排水作業が主でしたが、団員の活動の合間を見ながら交代でとりました。夜にかけて出動人数も増えてきたので、そのタイミングで交代しましたね。食事はコンビニなどの間に合わせて集めてきました。

〈副団長〉 地区で用意してくれたところ、炊き出しなど出してくれたところは？

〈五分団長〉 出動してすぐに近所から炊き出しを受け、活動する前から「どうぞ」なんていわれて困っちゃったこともありました。家を開放してくれて、温かいものをいただいたのはうれしかったですね。

〈副団長〉 活動する中で食事なんかはうまく取れないこともあって、団長にかけあっていただ

いたこともあった。こういった活動では、団員の休憩や着替えなんかは大事になる。やっぱり、そういったところも気を配って手配していかないとだめだね。現場では、ところで、この豪雨の活動で一番印象に残ったのはなんだろうか。

〈八分団長〉 やっぱり中ノ沢川ですね。たまたま上流で作業していた団員がいち早く異常を伝えてくれて、おかげで、付近の住民や団員に被害が出なくてすみ、良かったです。

〈副団長〉 団員の作業中の安全は第一に考えなくてはいけないんだけど、一分団でも危ないところがあったよね。

〈一分団長〉 ええありました。立っている地面をトビでつついたら、地面全体がゆさゆさ揺れたこともありました。そんなところに立ってはいけませんよね！団員の安全確保については神経を使いましたが、判断の難しいこともたくさんありました。要請があるのに現場に行かないわけにはいきませんから。

〈六分団長〉 自分だって経験が豊富なわけではないので、色々おこったってその後どうなるかがイメージできないんですよ。そんな中、現場の判断が求められることが多かったのも、大変でした。

〈三分団副分団長〉 現場を確認し、消防団では対応できないと連絡を上げても、それでももう一度現場を確認してくれと、何度も指示を受けたことがありました。住民の通報と、市の対策本部、消防の連携がうまく取れていなかったように思います。

〈副団長〉 そうだね。市の災害対策の中での消防団の活動は最初のうちうまくかみ合わないところがあったけど、団長が対策本部につめていたので、徐々に連携が取れていったよね。なにしろ現場の判断は大変だった。

〈七分団長〉 今回の水害での自分のテーマは、「祈り」でした。とにかく祈りだけでした。頼むから崩れないでくれと。何せ自分に経験が無いからわからないんですよ。でも住民の皆さんは自分たちを頼ってくるんですよ。

〈〆長〉 団本部としても、情報の受け答えには気を使いました。より必要な情報をより必要などころへ。でも、出した情報のその後のフォローがもっと必要でした。出した情報は最後まで責任を持つといった。

〈団長〉 情報が乱れていて、何をしなくてはいけなかったのが難しかった。地域と密着しなくてはいけないんだけど、地域と連携を密にして、地区としての本部を設定し、そこに情報を集約して重要度、優先度を把握していく。そんな動きが必要だね。（終）

災害活動を振り返り

副団長 伊藤 孝一

諏訪市では昭和58年に大規模な水害が発生。その後何度か局所的な被害はあるものの、河川改修・砂防工事は着実に進み、「災害のない町」はもう実現しているかに思われていた。「58災害」から23年が経過し、ある種の安心感が染み渡っていた中、遭遇した目の前の大災害。これに対して、わたしたちは万全な備えが出来ていたのだろうか。行政や市民、もちろん消防団でも、水害に対する危機意識が薄れかけてはいなかったか。近年稀に見る今回の豪雨災害活動について振り返る。次世代につなげられる物は何か。

「消防団に求められたもの」

大雨が続き降水量が増大すると、水はけの悪い箇所では浸水が起きる。当たり前のようだが、こうした事象は毎年繰り返し起きている。都度ポンプによる排水、土嚢積みによる浸水防止など水防活動を行っている。これらは限られた地区の一分団で作業するのがほとんどで、今回の出勤が水害に対する初めての経験である、という団員も数多くいた。

全市域での活動になると、まず情報収集が必要となる。団員の配置・作業命令などは、現場にいる分団長の判断に委ねられる事になる。どこの分団でどんな作業を行っているのか、資機材人員は足りているのか、出勤命令を下した団長や指揮を執る副団長は、随時把握していなければならない。

消防団に寄せられる依頼は、市内各所に起きている浸水箇所の排水、各地区からの情報による危険箇所の見回り・避難誘導、事業所・個人宅へ浸水防止作業などがある。

今回災害対策本部から強く要望されたのは、何よりも情報収集であった。対策本部からの依頼に対し、人員の配置・作業の実施・危険性の有無・作業終了報告などが早急に求められた。現場から離れた対策本部では市内がどうなっているか、知りたくても手段がなく、暗黙のうちに消防団が情報収集役として組み込まれていく。現場での作業と同時に、正確

な情報を迅速に送る事は、重要であるとわかっていながらも、非常に困難であった。

浸水防止については、土嚢積みやポンプによる排水作業にあたったものの、降り続く雨量が多すぎ、そのうえ諏訪湖から逆流してくる水の逃がし場所がない、という先の見えない作業となった。個人家庭から要請のあった家屋への浸水防止に対しても、初期の段階では、多くのものが対策本部から消防団に問い合わせが来ることになった。

土砂災害などの危険箇所は、地区役員と協議の上巡回活動をし、亀裂箇所などにシート張りによって養生作業を行った。

危険箇所付近の住民に対する避難誘導は、普段から地元につながるのある消防団に求められる役割である。広報活動、誘導活動など、一秒を争う危険を回避するために、整然と迅速に行わなければならない。

消防団に求められたものは、当然のことながら「機動力・組織力」であった。

「消防団が備えてきたこと」

消防団では有事の際迅速に行動が出来るよう、年間を通して各種訓練を行っている。昨年行った分団長研修では、中越地震の被災地である小千谷市を訪問し、地元消防団から貴重な経験談を聞くことが出来た。この体験を踏まえ、大災害時の情報収集の重要性を感じ、団本部機能の充実を図っている。

無線の移動基地局を配備して以来、各分団からの情報を取りまとめる技術は、訓練のたびに向上している。また行方不明児童捜索活動においては、諏訪市の地図を活用して視覚的に情報を整理することが出来た。（災害以後は携帯メールによる連絡方法を確立し、情報収集に役立てるべく準備中。）

水防訓練では、各分団長が現場指揮できるように、各々が事前学習をして工法を説明する。講師の話を聞いて実践するだけでなく、指揮系統の把握まで組み込んだ訓練となっている。また、改良土嚢積み工法は最近訓練に取り入れた工法だが、新川の越水などで有効に活用されていた。

こうした訓練は常に有事を想定して行うべきものだが、災害体験の少ない団員には難し

い。何を目的として訓練を行うのか、平時においていかに想像を膨らませて訓練するか、これは幹部の意識改革により、少しずつ進歩が見られている。

体験を語り継ぐこと、出来たこと出来なかったこと、失敗談など、日頃から定例防火デーなどを機会に、伝えておきたいことはたくさんある。

「災害活動から学ぶこと」

近年は、大災害に見舞われなかったこともあり、消防団単独で活動することがほとんどであった。今回のような、災害対策本部という組織体の中で、消防団はうまく機能できたのだろうか。総合防災訓練などは毎年催されているものの、年間行事の一つとしてイベント化されてはいないか。行方不明児童捜索や不審火の警戒などでも、各種団体間での密な連携が不可欠である、と叫ばれていたはず。これらを統括するのは当然行政である。

重要なのは、「災害に対応をする」という組織が出来た時点で、消防団はその組織の中での役割を全うすること。しかしながら、今回は消防団に与えられる任務が膨大すぎた。対処しきれない場合「出来ること」「出来ないこと」の精査をし、「出来ないこと」は対策本部に戻すことが当初は困難であった。災害対策本部の中での任務分掌について、マニュアルどおりに出来たかは明らかでないが、時間の経過に伴って少しずつ秩序が生まれ、役割分担がはっきりしてくる。消防団指揮本部でもやっと、「消防が行くべき作業」「消防団でなくても対応できそうな作業」の区分け等、整理ができていったのではなかろうか。

絶え間なく入ってくる。排水や浸水防止に関する作業依頼。出勤人員からして対応できない現実もある中であって、各分団長は適切に団員を配置できたと思う。また団本部では分団間で協力をするよう指示を出し、資機材の補給や手薄な地区への応援をした。被害箇所、安全確認、避難の必要性など、急を要する場面において、現場の分団長と地区役員の協議により、専門家の判断を仰ぐ前に行動できたことは、被害の軽減につながったと思われる。

しかしながら、自然の驚異を前に限られた人手を有効に活用できたのか、慎重に危険回避が出来たのか反省点は多くある。長期にわたる活動のなかで、休息・食事など、各分団とも狭い屯所が拠点となっていた。炊き出し・差し入れなどたくさんの好意を頂いたものの、消防団の対応について批判も聞かれる。各地区に対して消防団の要望を伝えられなかったこともあり、今後の課題として残されている。例えば、地区としての災害対策本部の立ち上げ、公民館の解放、要避難地区の決定、住民の誘導、被災地立入りに関する規制などが挙げられている。また、以前に行われていた、消防団幹部同行による市内の危険箇所確認作業についても、今後再開されることを要望したい。

今回の災害を教訓にして、各種団体が一堂に会し、行政主導で反省会を企画するなど、必ず総括しておかなければならない。諏訪市においては目に見える被害、人命に関わる被害を含め、後をなすような大きな災害とならなかったことが、来るべき今後の大災害に対する準備の怠りにならないかなと思う。

「災害に強いまちを目指して」

あの出勤から数ヶ月経ち、市民生活は平穩に営まれている。それぞれの団員がいかに活動したか、語られる場面は少ないが、消防団を温かく評価する声は各方面から寄せられた。国土交通省から戴いた水防功労表彰は、団員の苦勞が報われるもののひとつとなった。この表彰は、我々を支えてくれる諏訪市民皆さんのものであるとともに、常に消防団の世話をしてくれた、消防庶務課のお陰であると重く受け止め、これからの糧にしていきたい。

消防団は常に影の存在でなければならない。その活動は地道で光が当たることは少ないが、人々が安心して暮らしていくために、いざという時に頼りにされ、期待に応えることが出来るよう、常に進化し続ける消防団でありたい。

編集委員

団長		牛山 智明
副団長		伊藤 孝一
第一分団	分団長	後藤 準市
第二分団	分団長	中田 浩樹
第三分団	副分団長	藤森 克彦
第四分団	分団長	山田 政治
第五分団	分団長	平林 邦彦
第六分団	分団長	河合 一彰
第七分団	分団長	矢崎 宏規
第八分団	分団長	関 仁
ラッパ長		山田 正浩（編集事務局）

「折り」平成18年7月豪雨災害の活動記録

発 行 日	平成19年3月31日
編集・発行	諏訪市消防団 諏訪市上川3丁目2505
団 長	牛 山 智 明

印刷 山 田 印 刷
